

バウム研究における「未来の木」の位置づけ

河合可南子*・名島 潤慈

A Position of The Future Tree Drawing in Studies of Baum

KAWAI Kanako* & NAJIMA Junji

(Received January 15, 2009)

キーワード：バウム、変法、未来の木

はじめに

臨床心理学の分野では、絵は個人のパーソナリティを理解するものとして重要な役割を担っている。なかでも、バウムテストは単純で簡便でありながら、多くの可能性を持つ方法である。このバウムテストは日本においては1960年に京都市内の精神病院の精神科医によって着目されて以降、研究が進み急速に浸透していった(津田, 1992)。名島ら(2001)によると、病院・教育相談機関・児童相談所・大学などに勤務する臨床心理を対象とした小川ら(1997)の調査では、他の心理テストに比べてバウムテストが最も多く用いられている。

本稿では、バウムの変法について日本でどのような研究がなされてきたのかを紹介するとともに、筆者の考案した「未来の木」(2008)がそれら変法のなかでどのような位置づけになるのかを鶴田(2005)の分類を参考にしながら述べることにする。なお、本稿ではバウムを明らかに査定目的として用いている場合、また方法そのものに「テスト」という言葉がすでに用いられている場合は、そのまま「バウムテスト」という言葉を使っている。しかし、バウムを査定として用いるに限らない場合、「バウムテスト」という言葉を使うことでその意味合いが異なってくると思われる。そのため、査定のみが目的ではない方法にはバウムとだけ記述することにする。また、検査協力者によって描かれた「木」はバウムと呼ぶことにする。

1. バウムの変法

鶴田(2005)はバウムの変法を、①教示を変えるもの、②教示を変えて複数回施行するもの、③条件を変えて複数回施行するもの、の3つに分けている。ここでは鶴田の試みている分類にしたがってバウムの変法についてまとめる。

*山口大学大学院東アジア研究科

1-1 教示を変えるもの

教示を変えるものとしては、青木（1988）が「実のなる木」と「植えたい木」という異なる教示によって描かれた2つのバウムを比較している。

1-2 教示を変えて複数回施行するもの

教示を変えて複数回試行するものとしては、一谷ら（1985）の「2枚実施法」、青木（1980）の3枚法、検査協力者に実のなる木を描かせた後2枚目の画用紙に「木の根っこ」を描かせる技法（中園，1996）、被検児に「3本の木を描いてください」と教示する「3本の樹木画テスト（Dreibaum Test）」（Buechele-Karrer, 1974）、2枚を通常通りの教示で施行し、3枚目に「夢の木」つまり「最も美しいと思う木、あるいはできるものなら庭に植えたいと思うような木、最も思い出に残っている木、自分の思うままの想像の木」を描いてもらうというCastilla（1994）の方法などがある。

一谷ら（1985）の「2枚実施法」は、検査協力者に鉛筆で木の絵を描いてもらい、受容的・支持的雰囲気なかで他の心理検査や面接を行った後、やはり鉛筆でもう1枚別の木の絵を描いてもらうものである。一谷らによると、1枚目は新しい場面に直面した時の検査協力者の課題解決の仕方が示される。そして、2枚目には検査者－検査協力者の関係の深化と安定によって、検査協力者の真の姿（real self）が投影的に表現されるという。これは、Koch（1952）によっても「再テストを繰り返すことで、われわれは、より深層に到達することができ、かつ同一被験者のいろいろな層を次々ととらえることができる」と言及されている。

一方、森田（1995）も、1枚目のバウムを描いてもらったすぐ後に、「今のとは違う木をもう1本描いてください」という教示で2枚目のバウムを描いてもらうというバウムテスト2枚法を試みている。このバウムテスト2枚法に見られる一般的な特徴としては、①1枚目には紋切型の木が描かれやすい、②つまり、2枚目はより防衛が働きにくく、パーソナリティのより内的な側面が現れやすい、③バウムテスト2枚法を行うことによって、パーソナリティの立体的な把握ができ、被検者の予後や将来像の手がかりが得られる、ということがあげられる。

高田と森田（1996）は、健常者26名と臨床群（境界例と統合失調症）21名を対象として、ロールシャッハテストを用いたLandisの自我境界測度（D%）とバウムテスト2枚法における描画特徴との関連性を検討し、その結果、自我境界の弱い群と強い群との2群間において有意差が見られた描画特徴は、1枚目のバウムよりも2枚目のほうに多く見出された。したがって、自我境界の強度を測定するには、2枚目のほうがより有効であることがわかった。

さらに野瀬（1997）は、健常群40名と統合失調症群40名の全体的印象を評定して因子分析を行った結果、「樹木エネルギー」因子において、健常群では1枚目と2枚目に因子得点の差は見られなかったが、統合失調症群では、1枚目よりも2枚目のほうが有意に得点が低いことを見出した。

青木（1980）の3枚法は、3枚の描画の繰り返しといくつかの描画後質問を組み合わせたものである。青木は1枚目の描画終了後、その裏に、Cottle（1967）のサークルズテストを行っている。これは、「用紙上に過去、現在、未来という3つの円を自由な大きさと位置で描き、時間について感じていることを表現してもらう簡単なテスト」である。これに

は検査協力者についての別の情報を得るといった目的とともに、検査協力者が何度も実のなる木を描くという構えをもって、描画を変化させることが生じないためである。青木(1980)の描画後質問は、3枚のバウムを並べて、それぞれについて「どんな感じの木ですか、どんな風な木ですか」と問う。その後、3枚のなかから検査協力者自身が一番気に入ったものを選ばせ、その理由を尋ねる。

つぎに、選ばれたバウムについて、①木の生えている場所、②古さ、③どんな風に育ってきたか、④これからどうなっていくか、を順に聞いていく。青木(1980)は、それぞれのバウムについて検査協力者の簡単な説明をきくことで、描画の意図を知ることができるが、その説明が描画と一致しているかどうかが大変重要となるという。また、未来の状態を聞く質問では、自らの未来志向が語られると仮定して、したがって病的状態の検査協力者では予後と関係する。しかし、これはかなり意識に近いもののため、回復への志向といったものが現われてくるという。

1-3 条件を変えて複数回施行するもの

条件を変えて複数回施行するものとしては、枠付け空間ならびに丸枠付け空間のなかにバウムを描かせる技法(森谷, 1983; 森谷ら, 1984)、桜の木を描いてもらう“Baum-C”と木の絵を模写してもらう“Baum-S”(後藤, 1975)などがある。

森谷(1983)は、中井(1970)の風景構成法の枠づけ法を参考にしてバウムに応用している。森谷(1983)によると、枠づけ空間は自己と他者や環境との精神的葛藤の表現を促進する作用を持っている。一方、丸枠づけ空間では、①丸枠によって木と枠の接点が近くなり、外界との境界がよりはっきりと意識され、②描画面積の減少による二重の強い保護作用が生まれるために、内的表現よりもむしろ健康的な表現を促すという。また、枠づけをする順序も、枠ありを先に実施した方が、その逆よりも保護作用、凝集作用ともに効果的であると述べている。これは、中井(1970, 1974)が枠づけ法を施行してから通常の方法を施行することを、枠ありの施行で精神的な外傷が表現され、そのつぎに枠なしの白紙で「ホウタイを当てる」と表現していることとも一致する。

2. 「未来の木」の位置づけ

2-1 検査・方法・技法という観点からみたバウム変法

鶴田(2005)は皆藤章の『風景構成法のとくと語り』を引用してバウムを検査・方法・技法に区別する視点を提示している。皆藤は「臨床心理学はこれら三概念を厳密に区別せずに、これまできわめて曖昧にしてきた」という。それに対して、鶴田は「正確には、施行側の姿勢を厳密に区別することはむしろ不可能であり、必要なのは施行側の自覚」と述べている。

バウムとの関わりという指標から鶴田(2005)がバウム研究を分類する基準は、①査定のみを目的としているものを「検査」、②バウムに関わる姿勢に表現性、関係性、状況要因、検査者の要因、検査・描画時の動きやダイナミズムなどの要素が加味されていると感じられるものなかで、なお査定という目的に最も重心が置かれていると感じられるものは「方法」、③重心が査定以外にあるものを「技法」としている。

鶴田(2005)は「どのような目的であれ方法を変えるということ自体、施行する側の主

体性および能動性なしにはあり得ない」とし、新法・変法の施行は特にそうした課題性や関係性を意識したバウムとの関わりが前面に感じられるという意味で、「方法」に分類されている。しかし、「方法」も創造的であり得るし、「技法」にも「方法」的様相が多分にあるという。その意味で、バウムを区分するということが自体に矛盾があるともいえる。バウム変法のなかでも検査的であったり技法的であったりという立ち位置があるために、「方法」とおおまかに分類していてもそのなかの幅は広いと考えられるのである。

2-2 「未来の木」の位置づけ

「未来の木」は、1枚目は通常のパウムテストで行われるように、バウムを描いてもらう。そして、2枚目に1枚目の木の未来像を描いてもらう。その作業で終わってれば、質問などにおける回答の自由度は加味されないため「検査」寄りの「方法」だといえるが、「未来の木」は2枚のパウム描画後に質問をする。この質問の意図の一つは検査協力者の「未来の木」、ひいては未来の自分のイメージを湧きやすくさせるということにある。また、質問をしていくことで検査協力者の描画の意図を知ることができるのはもちろんのこと、検査者も検査協力者が持つ未来の木や検査協力者自身の未来のイメージを共有しやすくなるし、検査協力者自身が自分を知ることにもつながる。

青木（1980）はバウムの3枚法を実施しており、上述したように描画後の質問も行っている。検査協力者からの説明が描画と一致しているかどうかは解釈の重要なポイントとなる。「未来の木」も同様に、描画後質問による答えと描画とのずれに目を向けることで、全体のまとまりをとらえ得るし、解釈の重要なポイントとなると考える。また、これまで筆者が「未来の木」を施行してきたなかでは、検査者の質問に対し検査協力者が答えるという場のなかで、質問への答えを超えた印象的な言葉も表出する。描画後質問をすることで生まれるその場の広がりや、「未来の木」で生まれる体験をともに生きようとするものなのである。

鶴田（2005）はバウムの変法を「方法」に区分している。しかし、青木（1977, 1980, 1981, 1988）の研究のなかでのバウムに対する姿勢については「できる限り検査としての精度を高め、客観的視点をを用いることを怠らず、なおかつ全体的印象といった投影法本来の特色を損なわないような検査者の見方・技能を高める」ものと評価しており、その点から青木の研究は「方法」のなかでも、極めて「技法」に近いものであると位置づけている。筆者の考案した「未来の木」は鶴田による分類からすると、バウムの変法の一つであるため、「方法」にあたる。しかし、上述したように描画をするだけでなく、その後に検査協力者に質問をし、そこから派生したものも方法のなかに取り入れていることから、「未来の木」も「技法」よりの「方法」として位置づけられると考える。

一方、その解釈について「未来の木」は方法論としては確立されておらず、筆者のとらえ方次第になる可能性も否定できない。これまで筆者自身の方向性は、「検査」よりも検査協力者との関係性のなかで検査協力者の気づきや新しい発見、自身の課題の確認などに重点を置きたいと思ってきたために、あいまいな解釈をしながら治療的な場を持つことの二律背反に苦しんできた。それは皆藤（1994）の「治療を前面に出せば基礎的研究は顧みられなくなり、基礎的研究を前面に押し出せば治療は進展しなくなる」との言葉通りである。

しかしながら、バウムに対する姿勢として「未来の木」が目指す「最も理想的な方法を挙げるならば、描画という一つの人間の行為に対して、これらのあらゆる方向から適切な

接近がなされなければならない」(青木, 1979) という立場を構築するためには、全体的印象に頼るだけでなく、客観的視点を交えることが必要であることも確かである。客観的な視点がありながらも、バウムや検査協力者に向かう姿勢を誠実に持ち続けることが、これからの「未来の木」の目指すところである。

3. おわりに

本稿では、これまでのバウムの変法についておおまかに紹介してきた。そのなかで、「検査」なのか「治療」なのかという筆者が抱き続けてきた迷いが少し晴れた気がしている。おそらく筆者が持ち続けてきた迷いは、鶴田 (2005) のいう「バウムとの全人的な関わりの本質に迫ろうとするほど、知ること・体験すること・創造することがそこでは本来不可分であり、またバウムとのそうした関わりが矛盾をはらんでいる」ということと通ずるものであるのだろう。

「未来の木」には先行研究がない。新しいものを創造するのは、なんと難しいことだろうか。検査・方法・技法と区分することへの矛盾を抱えながらも、どの関わりも内包していくための課題は、少しでも基礎的研究を進めること、その解釈が礎とする理論を構築していくことである。

文献

- 青木健次 (1977) バウムテストにおけるバウム・イメージの多様性を測る. 心理測定ジャーナル, 13, 19-23.
- 青木健次 (1979) 投影描画法研究の動向. 京都大学教育学部紀要, 25, 209-222.
- 青木健次 (1980) バウムテストの臨床的活用. 京都大学学生懇話室紀要, 10, 59-81.
- 青木健次 (1981) 全体的印象からバウムテストを診る. 心理測定ジャーナル, 17, 2-7.
- 青木健次 (1988) バウムテストの安定性に関する検討. 心理測定ジャーナル, 24, 15-20.
- Castilla, D. D. (1994) *Le Test de l'arbre-Relation humainesnt problems actuels*. Paris: Masson. (阿部恵一郎訳, 2002, バウムテスト活用マニュアル—精神症状と問題行動の評価, 金剛出版)
- 後藤佳珠 (1975) 臨床場面に適用した“Baum Test”(I) 新しい技法“Baum-C” “Bum-S”を加えて. 芸術療法, 6, 53-62.
- 一谷 彊・津田浩一・山下真理子・村澤孝子 (1985) バウムテストの基礎的研究 [I] —いわゆる「2枚実施法」の検討. 京都大学紀要, Ser. A, 67, 17-30.
- 皆藤 章 (1994) 風景構成法—その基礎と実践. 誠信書房.
- 河合可南子 (2008) バウムテスト2枚法における「未来の木」の試み. 山口大学教育学研究科修士論文.
- 河合可南子・名島潤慈 (2008) 「未来の木」の特徴と意義. 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 26, 167-176.
- Koch, C. (1952) *The Tree Test: The Tree-drawing test as an aid in psychodiagnosis*. Bern: Hans Hüber. (林 勝造・国吉政一・一谷 彊訳, 1970, バウム・テスト—樹木画による人格診断法, 日本文化科学社)

- 森田裕司 (1995) バウムテスト 2 枚法の有効性に関する考察—臨床経験による検討. 中国四国心理学会論文集, 28, 90.
- 森谷寛之 (1983) 枠づけ効果に関する実験的研究—バウム・テストを利用して. 教育心理学研究, 31, 53-58.
- 森谷寛之・森 省二・大原 貢 (1984) バウム・テストにおける枠づけ効果—症例研究. 心理臨床学研究, 14, 73-81.
- 中井久夫 (1970) 精神分裂病患者の精神療法における描画の使用—とくに技法の開発によって得られた知見について. 芸術療法, 2, 79-89.
- 中園正身 (1996) 一変法としての樹木画法の研究—根を強調した教法の導入について. 心理臨床学研究, 14 (2), 197-206.
- 名島潤慈 (1999) 黒—色彩バウムテストの解釈. 熊本大学教育実践研究, 16, 61-65.
- 名島潤慈・原田則代・横田周三・森田裕司・増田勝幸・植村孝子 (2001) バウムテスト. 上里一郎監修, 心理アセスメントハンドブック 第2版, 西村書店, 186-197.
- 野瀬祥代 (1997) バウムテスト 2 枚法における全体印象の差異に関する一研究—SD 法による因子分析を用いて. 中国四国心理学会論文集, 30, 76.
- 高田晃治・森田裕司 (1996) バウムテスト 2 枚法を用いた自我境界の測定. 中国四国心理学会論文集, 29, 90.
- 津田浩一 (1992) 日本のバウムテスト—幼児・児童期を中心に. 日本文化科学社.
- 津田浩一 (1976) バウムテストの教示効果について. 心理測定ジャーナル, 12 (3), 5-10.
- 鶴田英也 (2005) 本研究の目的と位置づけ—バウムとの関わりの諸相. 山中康裕・皆藤 章・角野善宏編著, バウムの心理臨床, 創元社, 15-21.